様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　７ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６４７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２４９８

研究課題名（和文）メンタリング・システムとしての「守姉」に関する研究

研究課題名（英文）Research on the "moriane" as a mentoring system

研究代表者
岩崎　美智子（Iwasaki, Michiko）

東京家政大学・家政学部・教授

研究者番号：９０３３５８２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「守姉」と呼ばれる子守の習俗が機能していた1930～1960年代までの宮古諸島における暮らしについて、離島ゆえの厳しさをもつ反面、カツオ漁を通じた相互扶助と祭祀・年中行事によって島びと同士の一体感が形成され、女性たちの共同体的つながりや子どもの地域社会での役割も存在していたことを解明した。守姉となる少女は、近隣家庭から請われて幼児（守子）との間に擬制的なきょうだい関係を作って食事や遊びなどの世話をするが、その関係性と役割が地域住民に認知・承認されることによって自信と守子への愛情を育み、守子にとっても長い間守姉が表象として精神的拠りどころとなることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「守姉」という習俗は、血縁関係ではなく「作られる」関係であり、世話する側に他者からの承認と自信を与え、世話される側に自身の存在を保証してくれるロールモデルを提供する。このことから、時代背景や地域社会の変貌を考慮に入れる必要はあるものの、年長者（メンター）が年少者（メンティ）の成長発達を助ける「メンタリング」の一形態として、子育ち支援のプログラムを検討するうえで示唆を与える。本研究によって、人の成長には家族以外の他者との関わりが有効であり、支援を必要とする子どもが年長者との交流の機会を得られれば、子ども同士の機会格差縮小につながる可能性があることを確認できた。

研究成果の概要（英文）：In this research, we explore the lives of Miyako Islands of the period of 1930s through the 1960s. Though lives on the island was difficult to its remoteness, one of the positive aspects of this kind of society was that people created a support network amongst them through collaboration on skipjack fishing, and by way of rituals and annual events held throughout the year. We clarified the key role of moriane in the collaborative structures between women and of children in regional society.
The young women who acted as moriane were brought into the home from amongst nearby families to act as a kind of fictive kinship feeding and playing together with the the children of the house. As the moriane's role and relationship with the children was recognized amongst the local people, clearly affection tended to grow between the moriane and the children she looked after. For children who had a long relationship with a moriane, she tended to be a significant source of emotional support.

研究分野：福祉社会学、子ども学、ライフストーリー研究

キーワード：守姉　宮古諸島　地域社会　アロケア　メンタリング・システム　愛情のネットワーク　養護性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本の青少年の自己評価が他国の若者と比べて低いという調査報告があるなかで、子どもが豊かに自らの「生」を生き、自立していくための条件を考えたとき、成長過程において他者からの「承認」を得ることの重要性を確認するに至った。研究代表者が、社会的養護を受けた子どもの生活史から学んだことは、子どもは、幼少期の家庭や親によって決定的に規定されるだけの受け身の存在ではなく、さまざまな他者との出会いと体験によって成長していくという事実である。そこで着目したのが、ソーシャル・ネットワーク（愛情のネットワーク）の視点である。愛情のネットワーク理論では、複数の重要な他者からなる人間関係を、「人」と精神的な安定を支える「心理的機能」が結びついたセットの集合体ととらえ、個人にとって誰がどのような意味をもつかといった役割が分担されていると考える。人は、困難や危機に際しては、現実的にも象徴的にも「誰かとつながっている」という実感によって支えられるものである。つまり、自立に必要な精神的安定は、特定の他者に甘え、頼り、依存し、さらにその他者に必要とされることによって可能になる。子どもは、成長過程において、ときに他者に頼りながらも、自己を認め尊重してくれる存在を必要とするのである。

そこで、本研究では、沖縄県離島に見られる「守姉」を対象として、親以外の年長者（守姉）による子どもの養育について、形態としては「アロケア」であり、機能としては「メンタリング・システム」でもあるととらえ、守姉と守子との関係性の構築と、守姉以外の周囲の人びととの人間関係のネットワークについて検討する。沖縄県は、現在失業率が全国平均を大きく上回っており、多数存在する米軍基地やひとり親世帯の割合の高さなど、子育ち・子育ての経済的・社会的条件に恵まれているとは言いがたい状況にあるが、合計特殊出生率や里親委託率は全国有数の高さを誇っており、子どもを社会の宝と考える文化が残っている。沖縄社会を構成する人間関係の形態が変化したという指摘はあるものの、「社会で子どもを育てる」という沖縄の子育ち・子育て状況から学ぶ点は少なくない。また、沖縄県の離島のうち宮古諸島を調査対象としたのは、1960 年代まで多くの人が経験した「守姉」が当地で廃れた理由にある。隆盛を極めたカツオ漁の衰退による人口減少が、子育ての慣習を変容させたわけで、保育所の設立といった制度的な側面だけでなく、地域社会の変貌を詳細に分析することによって、少子高齢社会におけるアロケア創出の示唆を得ることができると考えた。

２．研究の目的

かつて宮古諸島に多く存在した「守姉」と呼ばれる子守の習俗について、守姉と守子の関係性構築と、守姉以外の周囲の人びととの人間関係のネットワークについて検討するため、以下の 3 点を行うこととした。

１）「重要な他者」と「愛情のネットワーク」の実態を具体的に明らかにする

本研究では､守姉か守子の経験をもつ本人に個別のライフストーリー･インタビューを行なう。この方法であれば、いつ（何歳のとき）、誰が、どのように、何をし、自分はそれをどう思ったかを明らかにすることができ、守姉と守子がそれぞれの人に求めた役割と機能を分析することが可能になる。人間関係の質的側面、つまり子どもは、他者に対してどのようなときに何を求めるのかという人とのつながりのネットワークの詳細が明らかになる。

２）「養護性」の形成過程を検討する

守姉となった少女が、年少の子どもを世話することにより、どのように「養護性」を獲得していくのかのプロセスを明らかにしていく。年少者や弱い者を保護しようとする感情が何を契機として生まれるのか、養育の態度や技術はどのように身につくのかが検証されるものと期待される。また、守姉－守子間の生涯を通しての関係性継続によって、成人した守子が、老いた守姉をいたわり、心配するといったケアの関係性の逆転現象についても考察を加える。

３）地域社会における社会関係資本としてのメンタリング・システムのモデル案を検討する

「守姉」だった子どもと「守子」だった子どもについて、彼女らの自立過程を、地域社会におけるメンタリング・システムの観点から考察する。守姉－守子の関係性の構築を生活史から把握するだけでなく、そこでの経験を地域社会におけるメンター－メンティ関係ととらえ、子どもの「自立」に必要とされる新たな社会関係資本のモデル創出に取り組む。

本研究の実施によって、子どもの自立の考察や社会的養育（アロケア）研究としての意義のみならず、子育ち・子育て研究に新たな視点を提示することができると考え、研究を計画した。

３．研究の方法

本研究は、（１）宮古諸島での個人史の聞き取りを中心としたフィールドワークと、（２）メンタリング･システムの先行事例調査との大きく二つに分けることができる。研究代表者の岩崎は、（１）のうち、守子だった人の経験、当時の子どもや女性たちの暮らし、地域社会の特質の把握に努め、（２）の退所者支援制度の聞き取りと、保護司の活動経験の収集によって守姉との比較研究を行った。研究協力者の松本は、おもに（１）の守姉－守子の関係性に焦点をあてたインタビューに取り組み、守姉のケアの特徴と「養護性」形成過程の検討を行った。研究協力者の高畑

は、主として児童養護施設職員への聞き取りと統計・報告等から、宮古諸島の子育ち・子育て状況を検討した。
（１）守姉と守子、宮古諸島の生活に関する調査
①2017 年 8 月予備調査として、池間島在住の 70～80 歳代の女性 3 名にグループインタビューを実施し、子ども時代の守姉の記憶を話していただく。
②2017 年 11 月と 2018 年 7 月に、池間島、伊良部島、宮古島において、1 対 1 の半構造化インタビューを行う。協力者は、守姉経験者 6 名（70～80 歳代の女性）、守子の経験がある方 3 名（50 歳代後半～70 歳代の女性）、守姉や守子の経験はないが、長年宮古諸島に住む女性 6 名（60 歳代～80 歳代）、児童養護施設施設長及び職員 4 名（40 歳代～60 歳代の男女）の計 19 名。
③2019 年 10 月宮古・池間島最大の年中行事であるミャークヅツを見学。
守姉または守子としての経験がある方々には、生活史や、守姉（守子）経験、守子（守姉）との関係を語っていただき、おもに SCAT を用いた分析を行った。
併せて、長年宮古諸島に住んでいる協力者（守子としての経験のある方を含む）には、子ども時代の生活や島の行事を含めた生活史を語ってもらい、ライフストーリーの手法で分析した。施設職員には現在の宮古諸島の子育て状況等についてお話しいただき、各種統計資料や文献から、守姉・守子たちの成育歴に影響を与えたであろう経済・社会的要因を考察した。
（２）メンタリング・システムに関する調査
①2020 年 3 月児童養護施設調査
メンタリング・システムの先進事例を検討するため、関東地方にある児童養護施設で退所者支援を担当するコーディネーターに聞き取り調査を実施した。
②2021 年 3 月～7 月保護司に関する調査（※緊急事態宣言が出されたため、依頼していた国内調査は延期となり、海外調査は渡航の予定が立たず中止となったため、比較的近隣で感染予防対策が取りやすい 1 対 1 の調査を実施した）
メンタリング・システムの一形態として、保護司の活動に注目し、「守姉」との共通点・相違点を考えながら、メンタリングに必要な要因を抽出するための聞き取り調査を 4 名の保護司（60 歳代～70 歳代の男女 2 名ずつ）を対象に実施した。

４．研究成果
（１）「カツオの島」の暮らし
宮古諸島の歴史、文化・習俗、産業を歴史学・民俗学や統計資料からも学びながら、インタビューを実施するなかで、「池間民族」という言葉を何度か見聞きした。先行研究が教えるように、宮古諸島のうち池間島、伊良部島佐良浜地区、宮古島西原地区に住む人びとは、自らを「池間民族」と称し、信仰、年中行事、漁撈民族としての自己認識を共通項として持っている。1930～1940 年代生まれの調査協力者たちの語りでは、「池間民族」としての自意識が認められた。本研究では、調査協力者たちが生まれ育った時代がカツオ漁の隆盛と重なっていることから、池間島、伊良部島佐良浜地区、宮古島西原地区を「カツオの島」と呼んで、そこでの生活を分析した。
1930 年代生まれの池間島在住女性の生活史を分析したところ、水くみと燃料集めに象徴されるような離島に住む女性たちの生活の厳しさと、敗戦間際の台湾疎開でのマラリア罹患、帰島後の空襲といった苦難が理解された。また、カツオ漁が盛んだった宮古諸島の漁師たちの記録や論文は多くみられるものの女性に焦点をあてた研究は少ないが、本研究により男性と対をなすかつお節製造の女工たちの労働や先輩・同僚女工との「女宿」的な共同体のつながりの一面が明らかになった。
伊良部島佐良浜地区に生まれ育った女性の語りからは、①カツオ漁の分け前を島びとたちに配ることによって、漁師だけでなく島民たちの一体感が築かれていた、②島では、祭祀や年中行事といった儀礼によって、社会集団が自己を再確認し、島びとたちの「池間民族」アイデンティティが形成されていたといった地域社会の特徴が把握できた。これらのことから、1930 年代から 1950 年代当時の佐良浜には、個人をつなぐネットワークと、互酬性、信頼性という「社会関係資本」が存在していたため、家族以外の人の手による社会的な子育ての一形態である「守姉」という子守の習慣も、地域住民に受け入れやすかったことが理解される。
宮古島西原地区で育った女性の語りと資料からは、①戦後間もなくの宮古島と伊良部島では、台湾・九州からの引き揚げ、マラリアの大流行、食糧難といった問題に直面して、島民の生活が厳しかったこと、②島の住民たちは相互扶助的で、他の島から来た母子や貧しい単身者など社会的弱者を排除することなく生活しており、子どもたちにとっても開放的だったが、島内の中心部から見ると周縁にあたる地域に対しては、一部差別的な対応も見られたことが明らかになった。
（２）地域社会における「守姉」と、守姉－守子関係
インタビュー調査から明らかになった「守姉」の特徴は、以下のとおりである。①守姉になるきっかけは、地縁もあるが、子どもの親に選ばれて依頼されることが多い。つまり、血縁関係にはない少女と子守される子どもとの「選択的・擬制的きょうだい関係」が作られるのである。そして、この関係は地域住民にも認知され、関係性は尊重され、子どもが成長した後にも重要な儀式や行事に来賓（＝重要なひと）として招待される。地域社会から評価される社会的な関係性であるということになる。他の社会成員から価値あるものとして「承認」される守姉は、その「承認」によって自己を信頼し、尊重することができる。②子守は、家の中で１対１で世話をするというよりは、守姉の生活圏の中で、地域社会の人びとと関わりながら進められ、制約は少ない。

それによって、守子は守姉以外の子どもたちとも遊び、交友関係も広がる。③守姉は、守子にとって憧れのロールモデルになることが多い。血がつながったきょうだいより、多少の遠慮や距離を含む関係性と社会からの承認は、守姉の守子への愛情と自信を育む。守姉と守子は互いに唯一無二の存在となり、相手が双方にとっての「重要な他者」となるからである。④守子であった女性は、守姉に「行動や存在の保証」と「激励や援助」を求めていた。幼いころは抱っこやおんぶなど、おもに身体的接触を通じた「ケア」によって、青年期以降は言葉による「教育的関わり」によって、両者の関係性は続いていった。このような特徴を考えると、「守姉」という習俗は、家族以外の人の手による養育という「アロケア」であるが、いまひとつは「メンタリング」（年長のメンターと年少のメンティとが一対一で継続的定期的に交流し、メンティの成長・発達支援を行う）の側面もあるという仮説が実証されたといえる。

（３）「守姉」の 2 形態、ケアの特徴と、「養護性」の形成

研究協力者の松本は、守姉に対する詳細なインタビューから以下のことを結論づけた。

①守姉の形態としては、依頼の方法や謝礼の授受などから「相互扶助的守姉」と「人形遊び的守姉」の 2 種類に分けられる。「相互扶助的守姉」は、守姉と守子両者の家庭間に経済的格差があり、金銭的な謝礼の授受はないが、守姉に守子の親から食事や衣類などの提供をする。「人形遊び的守姉」は、かわいい赤ちゃんを抱っこしたい、連れて歩きたいという少女の願望が動機となって、近隣で赤ちゃんが生まれると競うように守姉となり、赤ちゃんをおんぶしたり連れて歩きながら世話することを楽しむというものである。②守姉による子守は、食事や排泄の世話や遊びといった日常生活行為だが、少女が年少の子をおんぶしながら自らも遊ぶという形をとるため、身体接触を介して養護的構えが促進され、守子との愛着関係が形成されていく。接触は、同時双方向性をもつため、第三者が客観的に体験を共有できない。また、守子のポジティブな反応によって守姉の応答性が発揮されることから、守姉である少女は養育の仕方を身につけ、自らも生活技術を獲得しながら自立していく。③年少の子どもの子守をすることによって、世話する側の少女の「養護性」が形成される。子どもの養育機能（Lewis,M.）５つのうち、子守の過程では行動としての「世話（care giving）」も大事だが、言葉による愛情表現や非言語的なやさしさの表現とされる「養護（nurturance）」がもっとも多く語られた。また、守姉自身が年長者との情動的交流があり、かわいがられたと思える経験を有していた。守姉である少女自身が育てられている時期に、自分より幼い子どもを育てる経験は、「世話される自分」の姿を重ね合わせることができ、養護性役割を内面に形成することが可能になる。加えて、長じてから離れた生活をしていても守姉－守子関係は生涯特別な関係として続くため、双方が「表象」としての精神的拠りどころとなっていることも確認できた。

（４）メンタリング・システムの先行事例

メンタリング・システムの先進事例を検討するため、関東地方にある児童養護施設で退所者支援を担当するコーディネーターに聞き取り調査を実施した。聞き取りを実施した施設では、退所者支援の一環として、住宅支援と生活支援の事業を行っている。住宅費は自治体が補助し、精神的支援はボランティアである市民が 1 対 1 で相談にのる。メンティである退所者とメンターである支援者をつなぐマッチングやモニターを行うのが施設のコーディネーターである。このような若者の自立支援システムは、地域社会におけるメンタリング・システムのモデル開発の参考になり得ることが理解された。

また、沖縄離島における「守姉」という子守の習俗とは、目的も時代背景も対象者の年齢も異なるものの、同一地域内に居住する年長の保護司と犯罪・非行をした者とが一対一で継続的定期的に交流し、対象者の改善・更生を行う活動を「メンタリング」の一形態とみなし、4 名の保護司から活動状況を聞いた。その結果明らかになった点は、以下のとおりである。①保護司になったきっかけは先輩保護司からの誘いが多く、「自発性」を特色の一つとする他のボランティアとは異なる傾向を示している、②対象者と保護司との関わりは継続的・定期的だが、期間限定的であり、その関係は対象者から見れば「隠したい」ものである。そのため、他の市民の理解や協力を得ることが難しい、③保護司の役割は、対象者の話をよく聴き、彼/彼女らが暮らしている生活世界以外の日常や異なる考え・価値観があることを伝えること、つまり社会へと開くことにある、④保護司は「民間性」と「地域性」が特徴だと言われるが、対象者と同地域に居住することは、生活状況の把握や定期的・継続的な関わりが可能であるというメリットと同時に、対象者が感じている「隠したい関係」が露呈する可能性といったデメリットもある、⑤保護司をすることの意義は、活動によって対象者と保護司双方の内面と関係性が変化していく「相互変容」にあることなどが挙げられる。保護司の活動は、目的が対象者の改善・更生にあるため、「守姉」のような子守とは単純に比較できないものの、一対一の継続的定期的交流から生まれる両者の内面・行動面の変化や関係性の変容などについては、今後も検討する意味があると考える。

以上のように、本研究では、根ケ山らの研究以外はほとんど知られていない「守姉」という子守の習俗と、それらが機能していた地域社会の考察によって、子どもの成長発達を促すメンタリングの側面を明らかにすることができた。アメリカ・イギリス等で行われている教育現場でのメンタリング・プログラムに対して、日本の地域特性を考慮した子育ち支援検討の一助になることが期待されるだろう。インタビュー実施の予定時期になると新型コロナ感染拡大がおこって、度重なる研究計画変更を迫られた本研究であるが、今後は、メンタリング・システムの詳細な調査を実施して、議論を深め、研究成果の社会的還元をめざしたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 高畑祐子	４．巻 －
２．論文標題 宮古島における社会的な子育て	５．発行年 2023年
３．雑誌名 「カツオの島」の暮らしと「守姉」―宮古諸島の女性たちに聴く―	６．最初と最後の頁 85-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩崎美智子	４．巻 18
２．論文標題 書評「沈黙の扉が開かれたとき―昭和一桁世代女性たちの証言」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	６．最初と最後の頁 165-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岩崎美智子	４．巻 61
２．論文標題 「カツオの島」の女たち（３）―沖縄・宮古島西原Cさんと「守姉」―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東京家政大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1－10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松本なるみ	４．巻 61
２．論文標題 沖縄離島の習俗「守姉」の存在とその特徴―伊良部島の「守姉」―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東京家政大学研究紀要	６．最初と最後の頁 37－42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 岩崎美智子	4．巻 60
2．論文標題 「カツオの島」の女たち（2）―沖縄・伊良部島佐良浜Mさんのライフストーリー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東京家政大学研究紀要	6．最初と最後の頁 1―10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 岩崎美智子	4．巻 59
2．論文標題 「カツオの島」の女たち（1）―沖縄・池間島Sさんのライフストーリー―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東京家政大学研究紀要	6．最初と最後の頁 1―11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 松本なるみ	4．巻 59
2．論文標題 沖縄離島の習俗「守姉」によるアロケアと養護性―池間島の「守姉（ムイアニ）」―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東京家政大学研究紀要	6．最初と最後の頁 35―43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 松本なるみ、岩崎美智子、高畑祐子
2．発表標題 「守姉」にみるケアの相互性
3．学会等名 日本乳幼児教育学会第32回大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 松本なるみ、岩崎美智子、高畑祐子
２．発表標題 「守姉」の誇り―宮古島の「守姉」の語りから―
３．学会等名 日本乳幼児教育学会第31回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 松本なるみ、岩崎美智子、高畑祐子
２．発表標題 信頼される守姉―伊良部島の場合ー
３．学会等名 日本乳幼児教育学会第30回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 松本なるみ、岩崎美智子、林祐子
２．発表標題 表象としての守姉―池間島の場合―
３．学会等名 日本乳幼児教育学会第28回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岩崎美智子
２．発表標題 女性の声を聴く
３．学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会第16回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

報告書（論文集）として、岩崎美智子編『「カツオの島」の暮らしと「守姉」―宮古諸島の女性たちに聴く―』2023年（総ページ数95）を作成し、調査協力者や研究者に配布した。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	松本　なるみ (Matsumoto Narumi) (70442027)	東京家政大学・家政学部・准教授 (32647)	
研究協力者	高畑　祐子 (Takahata Yuko) (50847895)	東京家政大学・家政学部・講師 (32647)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関